

応答Ⅲ

倉沢正則「伝道の担い手」への応答

相馬伸郎

小論は、20年の牧会経験のなかで、二つの開拓伝道に従事した者としてのものである。現在、仕えている日本キリスト改革派教会名古屋岩の上传道所の開拓初期、「正しい伝道を旺盛にしよう。しかし、正しくない伝道ならしない方がよい。」と言い交わした。教会は、伝道によって自らを形成するからである。正しい伝道とは、伝えるべき福音の正しさと伝え方²の正しさとを意味する。それなしには、神の教会の形成は、破綻するからである。もとより、正しい伝道とその実りとは、洗礼入会者の数など、いわゆる教勢によってのみはかられるものでは決してない。むしろ、そこに、いかなる教会が形成されるのかによって、はかられるべきものであろう。

「序」について

発題者は、現代日本の教会の伝道の課題として二つのものを提示する。「教職中心主義と信徒の受動性」そして「伝道力の低下」である。つまり、今日の我々の伝道力の低下の危機は、伝道の担い手としての教会の職務制度の不健全さに求められているのである。

¹ 開拓開始1994年から99年までは、単立、自給開拓伝道に従事。

² 例えば、07年、アーサー・S・デモス財団によって、テレビメディアなどによってなされた「パワーフォーリビング」というトラクト無料配布の活動が、日本の諸教会にどのような実りをもたらすことができたのか否か、日本社会にキリスト教の有効な宣伝をなし得たのか否かを、調査することは今後のために、有益であろう。

1 聖霊と伝道の担い手 について

発題者は、伝道について語る際に先ず、聖霊の働きに集中する。まったく賛同する。伝道は、徹底して三一の神の主権的働き、「神の伝道」であるが、それは、地上において、聖霊のお働きとして展開される。聖霊は、人々に罪、義、また裁きについて啓蒙し、主イエス・キリストへの信仰を与え、救いを実現してくださるからである。さらに、聖霊は、ご自身の実りである彼らをご自身の宮である教会へと召集される。そして、彼らをご自身の栄光をあらわす器、伝道の担い手となされる。その意味で、伝道とその担い手としての教会を考える上で、聖霊論的パースペクティヴ、思考は決定的に重要であり、優先されるべきである。キリスト論的にだけ捉えようとするなら、制度的教会論の構築は可能であるが、現実の生きた神の民を捕らえることはできない。聖霊論的に捉えられた教会は、聖霊によって、イエスに劣らない神的リアリティを持つ³存在と信じる⁴ことが可能となる。

「聖霊の交わりとしての教会」については、使徒信条の「聖徒の交わり」に連なる概念として理解する。つまり、「聖霊の交わり」とは、父と子と聖霊において一つの交わりに生きる神が、失われた罪人たちを、その交わりの只中に招き入れるために、御父が御子を通し、聖霊を發出させて、信じる者たちを、人となりたもうた御子に結び合わせることによって、御自身の交わりに招き入れてくださる御業のことである。キリスト者は、この聖霊の交わりの内に生かさされ、キリストと結合させられ、三一の神の交わりの内に生かさされる。その交わりは、具体的な場において与えられ、具体的な形を取る。それこそ、聖霊の家である教会に他ならない。

ただし、「聖霊がおられるその所に教会は存在する」との事柄については、い

³ A・ファン・ルーラー「キリスト論的視点と聖霊論的視点の構造的差異」牧田吉和訳、季刊教会 No72

日本基督教団改革長老教会協議会 2008 年秋号、10 頁

⁴ 基本信条は、いずれも教会を第三項の神学（聖霊への信仰）において取り扱い、「教会を信じる」と告白する。

ささか説得されにくい。もとより聖霊は、偏在する神にいましたもう。聖霊は、福音の伝道によって、神の民を召し集め、その中から務め人である器を選び立て、教会を生み出す。教会は、主イエス・キリストを信じる民の交わりであり、聖霊は、その只中に臨在したもう。聖霊は、通常（ほとんど必ず）、「媒介」する器を用いて、ご自身の御業を遂行なさる。真実の教会のあるところに聖霊は存在するのである。よって、我々の教会形成の目標は、常に聖霊の力にあふれた教会として立つことにある。

聖霊は、キリストの霊であり、キリストを証言する霊である。それゆえに、人は、聖霊によってのみキリストを主と告白させられる（1コリント12:3）。主告白がなされるところに、教会は生起する。主の主、王の王なるキリスト・イエスへの告白は、この世のありとあらゆる領域、政治、経済、文化、生命倫理、環境などの諸課題に向けて告白される。教会は、キリストの主権に服さないすべての事柄、領域を宣教の課題とする。教会は預言者として語るだけではなく、祭司として執り成し祈り、王としてディアコニア（愛の執事的奉仕）をもって弱きにある人々に奉仕することへと呼び出されている。ただし、宣教の課題としてのこの世の諸課題に取り組むことが、伝道を疎外してはならない。つまり、教会が預言者として、福音を言葉で伝え、証しする伝道を最優先させないのであれば、宣教は、この世の価値観の中に埋没させられ、教会固有の使命を果たしえない。何よりも教会が、自らの社会的活動によって教会の課題を担えたと誤解すれば、自らを神にしてしまう罪すら犯すことになる。神によらなければ、つまり、それを告げる福音の言葉の伝道によらなければ、人類の究極の課題はもとより、諸課題の真の克服、解決へと導かれることもありえないからである。

さらに、聖霊は、「エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」（使徒言行録第1章8節）と予告されたとおり、教会を空間的な広がりへと駆り立て、励まし、主イエスの宣教の御業を継承し、進展させる。「まさに教会の駆動力としての聖霊の姿」を見ることができよう。「したがって、宣教的でない教会というものは、自己矛盾であり、御霊を消そうとするものである。」⁵との言葉に、我々も心から同

⁵ ローザンヌ誓約第14項「聖霊の力」より

意する。

伝道の主は、教会の主であり頭なるイエス・キリストに他ならないが、そのイエスは、ご自身の霊によって、神の民の共同体である教会を通して、彼らを伝道の担い手とする。それゆえ、伝道は、徹底的に神の伝道であり、聖霊の伝道である。しかし聖霊はまた、徹底的に、罪深い人間、欠け多いキリスト者を用いて御業を進められる。徹底して神中心の働きである伝道はまた、徹底的に「担い手」の信仰と服従とを求める。そこに、担い手の訓練、修練が重んじられるべき所以がある。伝道の担い手としての神の民、キリスト者の霊的な修練と技術的な訓練を軽んじることは、聖霊の本質を逸脱する仮現論的な異端思想や熱狂主義へと転落するであろう。主イエスもまた弟子たちを訓練することなしには、派遣したまわなかった。ペンテコステの聖霊の注ぎの前に、主イエスとの共同生活による人格的、実践的訓練が豊かになされたのである。それゆえに、伝道の担い手であるキリスト者をどのように訓練するのか、ひいては、神の民を奉仕者へと整えるべき牧師の訓練をどのように神学校で施すのかも、重大な課題となるであろう。

2 伝道的教会論 について

次に、発題者は、「ローザンヌ誓約」の教会観に大きな影響を与えた、スナイダーの議論を紹介して、「教会の伝道的な性質を簡潔に聖書から解き明かしている。制度的硬直化の中であって、伝道力を失いつつある日本の教会にとって、彼の聖書に見る教会観は、多くの示唆を投げかけている。」とする。ここに、発題者の問題意識が明かされる。「伝道力の低下」の元凶としての「教職中心主義と信徒の受動性」つまり、教会の「制度的硬直化」である。

はたして、現代日本において伝道する我々は、「制度的硬直化」を真実に課題とする状況にあるのであろうか。ローザンヌ誓約は、世界の、とりわけ欧米の福音派の問題意識が根底に据えられている。制度的硬直化の問題意識は、そこで説得力を持つであろう。しかし、我々の状況は、いかがであらうか。そもそも我々は、教会の制度を整備、整頓するために戦った教会の改革者たちの信仰的戦いを誠実に継承し、真摯に発展させてきたのであろうか。むしろ、欧米に

おける大前提のキリスト教伝統を移植、吸収、展開することなく、むしろその表層部分だけを、取り込もうとして来たのではないか。大伝道集会で大勢の改心者を獲得しようとする運動、教会を効率的に成長させる運動等々である。この根本的事実を、勇気をもって正視し、謙虚に克服しようとしめない限り、我々の営みは今後とも、「空を打つ拳闘」にならざるを得ないのではないか。

さて、ローザンヌ誓約第六項の結語、「教会は制度であるよりも、むしろ神の民の共同体であり、いかなる文化、社会もしくは政治組織、人間のイデオロギーなどと同一視すべきでない。」は、ハワード・スナイダーの主張に基づくものとのことである。また、スナイダーの議論として、「『見える教会』と『見えない教会』の区別について、前者は教会の『制度的(institutional)』理解で、ここでは『見える教会』と教会の本質的要素が同一視される。後者は教会の「神秘的(mystical)」理解で、ここでは教会は時空を越えたところに置かれ、「見えない」真の教会とされる。この両方の理解は、『文化』を真に考えていない」と紹介される。目に見える教会と見えない教会の議論は、改革者、とりわけカルバンの教会論⁶の根底をなすものである。真の教会とは何か、どこにあるのかを考える上で、この議論を外すことはできない。そもそも目に見える教会、地上の制度的教会が、目に見えない教会、公同教会に連なるものとなりえるかどうかの徹底した議論こそは、およそ、教会論の要諦である。それゆえ教会論は、救済論やキリスト論、何よりも三一論の枠の中で語られなければ、本質を逸脱する議論へと転落する。つまり、「救いの確かさ」に徹底的にこだわるところから、構築しなければ、教会を機能論的にのみ捉える過ちに陥る。そもそも、「我々は、どうすれば『伝道の成果』を挙げることができる教会として、変革できるのか」というような議論は、正しい実践神学的な発想とはなりえない。

教会という霊的制度を文化、社会、政治組織、人間のイデオロギーなどの制度と混同して議論することは、危険極まりない過ちである。教会の霊的制度は、三一論と二性一人格論という教理の中の教理の中で議論されるべき事柄である。教会とは、三一の神への信仰に基づき（基づいてのみ）、神の教会として信じられるべき存在である。繰り返すが、教会論は、キリスト者の救いの確かさを明

⁶ 『キリスト教綱要』IV、1、7他

確にするためにこそ、整えられてきた教理なのである。伝道と言いながら、手渡すべき救いが「主観化」し、「あいまい」なままであれば、正しい伝道とその結実である教会の形成を成し遂げることは、ありえないのではないか。目に見える教会とは何かという議論は、二性一人格のキリストの臨在を保証するために、目に見えない教会の本質から議論すべきであろう。

今日の我々の伝道の状況の根本的危機は、そもそも、伝えるべき福音（事柄）があいまいであるゆえに、神の救いそのものが観念化され、「救い」ではなく「救いのようなもの」で満足し、それが喧伝されていることではないか。そもそも伝えるべき神ご自身が不明瞭のまま、人間的な側面のアプローチが先行されているところに、伝道力の低下がもたらされているのではないか。横道にそれるが、たといかに宣教学が、福音や教会を、現代にコンテクスチャライゼーションする有効な道を提示しえたとしても、聖書テキストもしくは教理から離れているのであれば、なんの伝道、なんの救いになるであろうか。

その関連で前後するが、スナイダーの教会理解の第二については、首肯しがたい。「聖書は教会を制度的よりもカリスマ的観点から見ている。」「教会が活性化し成長するためには、制度的よりもカリスマ的モデルを必要とする。」制度とカリスマを相反するものとして見るなら、教会についての議論は、いつまでも空転せざるを得ないであろう。伝統的教会と非（もしくは反）伝統的教会とを対立させるだけになるのではないか。使徒言行録は、明らかに制度的教会形成の「揺籃」を示している。既述のとおり、伝道の担い手である教会とその民であるキリスト者は、聖霊に励まされ、命をかけ、また生き生きと、キリストの福音を証言し、伝道の実りとしての「神の民の祈りの家である教会」を、当時の世界中に植えつけて行ったのである。

第一の点については、全く異論の余地はない。「教会は、神が意図される宇宙大の和解の地上の代理人なのである（エペソ 3:10）。伝道は、こうして和解の代理人としての教会の役割の中心となり、最も優先されるべきものなのである。その時、神の御国は歴史の中にもたらされ、ご計画は教会を通して遂行される。」福音とは、平和の福音である。福音を伝えさせる主体であられる神ご自身は、父と子と聖霊の交わり、つまり完全なる平和の交わりの内に存在する神、まさに平和の源なる神でいらっしゃる。我々人間は、他ならないこの神の平和にあ

ずかるために創造されたのである。墮落後、平和の地、エデンの園を追放され、神の平和を失ってしまった。しかし、御子によって贖われ、再び、地上における神の平和の拠点、橋頭堡としての教会の交わりへと、洗礼によって、我々は招き入れられて、神の平和を享受し、これに生きる者とされたのである。平和にあずからせられるために救われた我々は、同時に、平和をつくり出すためにも救われている。その意味で、福音宣教こそは、人類の究極の憧れである平和を実現する手段に他ならないし、伝道しない教会は、神の御国への望みを見失い、神の御国拡大の御心を見失って、この世の楽しみ、価値観に従って生きるものへと墮落せざるを得ないであろう。

第三の点についても、旧新約を正典とし、連続した救済史として見るとき、教会を「共同体」「交わり」つまり、「神の民の祈りの家」として見ることの優位性は、大いに認めることができる。『「キリストのからだ」』は隠喩であって定義ではない。』とは、その通りである。しかしもしも、キリスト論的教会論が制度的教会形成へと傾斜することを憂慮する意味で、「キリストの体なる教会」を消極的に捉えるなら残念に思う。この表現は、神の民の多様性と統一性と主イエスとの関係を明らかにする実に豊かな隠喩として積極的に捉えたい。

次に「教会論的宣教学から宣教的教会論へ」についてである。寡聞にして、「教会と宣教」とが「別個のもの」、「相對峙するもの」とする理解があることを知らなかった。改めて我々は、市川コーディネーターの理解⁷を共通地盤としたく思う。宣教しない教会は、自己矛盾である。「神の宣教の民としての教会」は、神の国の完成に奉仕するべく召された教会の自己像である。

第三に、『「礼拝共同体」であり、『宣教共同体』である教会』についてである。宣教（伝道）は、神の民とされた驚くべき神の御業をたたえ、全存在をもって神の栄光をあらわす行為、礼拝行為である。それゆえ、教会は、神の民の「祈り」の家、つまり神の民の「礼拝共同体」となる。礼拝こそが宣教の目標であり、またその動力である。神は、ご自身の民を礼拝へと恵みによって招集し、

⁷ 「講師各位」1頁「伝道は一つには、教会の働きである以前に、教会の存立と形成そのもの、正に教会のアイデンティティーであり、さらに神の国の成就に仕えるという地上における存在理由（レゾン・デートル）です。」